

催眠鎮守府 サンプル

——艦娘、というオカルトがある。  
過去に沈んだ艦艇の魂が少女となって顕現する……そんなオカルトが。

現在、そのオカルトは世界で幅をきかせている。  
数多の鎮守府が設立され、数多の艦娘が顕現し、笑い、泣き、愛を囁き……。

では、だ。

どうして他のオカルトがないと言えるのか？



「訓練士、とな？」

長い紫の髪をした少女が、扇を閉じながら言う。  
少女の名は初春、某鎮守府の秘書艦を務める古参兵だ。

「うん、何でも艦娘の弱点を直す人なんだって」

答えるのは白い制服を着た少年。彼がこの鎮守府の提督である。  
執務用の大きな机がより大きく見えるほどの小柄で少女然とした雰囲気さえある彼は、初春に告げた。

「弱点のう……わらわたちの弱点とは一体なんじゃ？」  
「わからない。けど、上の方からぜひ受けるべきだって……」  
「ふーむ……」

そんな会話が交わされたのち、一人の男が部屋へと入ってきた。

「どうも、訓練士です」

その男は、見かけはただの整備士に似ていた。そこらの街にいくらでも居そうな男である。  
だが——

パチン、と指を一つ鳴らした瞬間、部屋の雰囲気が様変わりした。  
部屋で遊んでいた小人のような少女たち……鎮守府での一般呼称”妖精”たちが、みな男の方を見た。  
そして、訓練士の男の元へと集まった。

「おお？どうしたことじゃ」  
「なに、ちょっとした手品ですよ。これから始めることに必要でしてね」

そして、男が初春を指で示すと、妖精たちはそちらへと群がっていく。

「な、なんじゃ？」  
「”動かないで、身を任せて下さい”ね」  
「そ、そうは言っても……！？」

初春の白いワンピース型の制服の中にまで、妖精は潜り込んでいった。またある妖精は小ぶりの胸に、別の妖精は尻につかまり、体をくすぐり始めたのだった。

催眠鎮守府 サンプル

「さて、提督、これから見て理解してもらおうのは、艦娘の弱点についてです」  
「こ、これ！何をするのじゃ！これは……！」

妖精たちの手つきは徐々に熱を帯び、初春の乳首やクリトリスを責め、膣内にも軽く腕が突っ込まれていく。  
妖精の腕はちょうど人間の指のように膣内をかき回し、快樂を与えていく。  
提督は顔を赤らめながら、初春の方をただ見るだけだった。

「んっ……あっ」

初春から徐々に甘い声が上がっていく。  
それは、『女』の声だった。

「分かりますか提督。艦娘は人間としての利点と欠点を持つのです。簡単に言えば、視界の自由、姿勢の自由といった  
人間的自由を得た代わりに、人間的な弱点をも得てしまったのです」

「は、はあ……」

「まあつまり、鋼鉄の塊ではなくなった事で痛みも快樂も得てしまったわけですね。だから私は、それを訓練しに来たのです」

初春は喘いでいた。息を荒くし、乳首を膨らませ、股ぐらを濡らして昇天しかけながら。  
そして、我慢の限界に達した。

「み、見るな、見るでない！」  
「いいえ”見てください”提督」

訓練士のたった一言に、提督は何故か従わざるを得ない感覚を持ち、そのまま初春を見つめていた。  
いや、それは単なる欲望の肯定だったのかも知れない。  
普段は慕うとよいとからかうようであり、破廉恥な事を諷める馴染みの秘書艦。  
その彼女の快樂に悶える姿なのだ。その意味では、訓練士の言葉は後押しに過ぎなかった。

「み、見る……あっ……」

ついに、初春が漏水した。股間部からしゅろしゅろと音を立て、温かいものが流れ落ち始めた。  
快樂にぼうっとした頭ながら、見られてしまった羞恥から顔を真っ赤にしながらか初春はその場に膝から崩れ落ちる。

その様を、提督は頬を赤らめながら眺めるしかできないのだった。



鎮守府全体緊急招集が、その日行われた。

病欠等不可、高速修復剤使用許可。通常ならば限定作戦海域への突入時程度にしか行われない事である。  
何が起きたのかと訝しみながら、ある艦娘は緊張気味に、ある艦娘は面倒くさがりながら、  
ある艦娘は締め切りがあるとバックレようとして姉妹に捕まりながら、と色々ありつつも鎮守府の皆が講堂に集められた。

「何なんだろうねーったく」

催眠鎮守府 サンプル

文句を言いながら壇上の提督を眺める艦娘たち。  
遠征すらも止めるほどの緊急事、さぞや大ごとなのだろうと思いながら聞いてみれば。

「本日から、鎮守府に新しい訓練が取り入れられることになりました」

ざわざわと、皆が口々に何だそれはと言いつつ。  
当然である。高速修復剤——通称バケツは、普通は戦闘後のダメージ回復に用いる貴重品である。  
その利用を許可してまで病欠等の言い訳を封じておいて、内容はガリ版刷りでも回覧しておけばいいようなこと。  
暴動とまでは言わないが、当然ながら引きずりだされたことに不満を覚える艦娘も出ていた。

「何じゃそら……」  
「帰ってゲームの続きしたい……」

しかし、事態はすぐに一変する。

「こちらが上層部から招かれた訓練士の方です」

提督の紹介と共に現れたのは——男と、男の引くリードに繋がれた首輪だけをした艦娘だった。  
それを見た瞬間、全員がざわつく。状況を理解できず、ただ混乱する。

その瞬間、訓練士の”力”は全艦娘の脳裏へと届いてしまった。

首輪をつけた艦娘、初春は抵抗していない。このことを異常だと訴えもしない。  
それを見た艦娘たちも、このことを異常だと思わなくなり始めた。

「えー、皆さん。皆さん艦娘は人間に近い肉体を手に入れた事で、弱点を得てしまった。  
その矯正を行うために、私はここに来ました」

男が手に握ったスイッチを入れると、初春が悶える。  
膣内に入れられたローターが稼働しているのである。

「御覧の通り、”艦娘は痛みに耐性があっても快樂には耐性がない。私はこれを直すためなら、何でもする”つもりです」

この場合の”何でも”とは、本来ならば女性にとって問題になる行為も山ほど含まれるニュアンスである。  
が、それを聞いた艦娘たちは、反論をしなかった。ただ、男の言葉を受け入れた。  
こうして、晒しものにされた初春を皆が眺めながら緊急招集は終わった。



その日から、鎮守府内ではセクハラという概念が存在しなくなった。  
男が何をしようとも、それは”訓練”だからである。

出会い頭に手近な部屋に連れ込まれ、ローションを塗りたくったペニスで突き込まれても。  
トイレの鍵を開けられて、用足し中に潮まで吹かされても。  
寝室のベッドの中に待機されていて、一夜を共にすることすらも。

そんな状況の中、初春は訓練士に怒りを募らせていた。

「よくもわらわをあのように辱めてくれたのう……」

提督と全艦娘の前で無様を晒されたのだ。  
当然ながら、訓練士に対していい感情など持ちようがなかった。

そこで初春は、訓練士を追い出す計画を立てた……。  
無論それとて、訓練士による思考制御の範囲内の事だったが。

◆ ◆ ◆

「のう、訓練士殿」  
「何でしょうか？」

今訓練士と初春がいるのは、初春とその姉妹の居室である。そこでは、丁度訓練士が初春の妹である子日を犯していた。  
ピンク色の長い三つ編みが揺れ、小ぶりの胸が揺れ動きながら穴のあいたスパッツから淫水が音をたて弾けている。

「わらわも、参加させては貰えぬかや？」  
「他の子の訓練中に、ですか？」

言いながら、訓練士は子日の腰を掴んで何度も打ち付ける。  
子日は普段の明るい調子を見せる事なく、枕に顔を埋めて必死で嬌声をかみ殺していた。

「嫌ならいいのじゃ。じゃが、訓練士と名乗るからには自分も快樂に弱くてはのう？」  
「私の事を試したい、と」  
「そうじゃ」

では、と訓練士は腰を引き、子日の中から引き抜いたぬらぬらと光る肉棒を初春の前に見せつける。  
そしてそのまま、顔の方へ近づけた。

ずい、と長大で赤黒いモノを見た初春は慄いた。

「それで？」

一瞬、場が固まった。

「な、なんじゃ。急にこんなものを近づけよって」  
「？ そちらこそ、何もしないんですか？ 快感を与えるなら、手や口の方がいいでしょう？」  
「……そ、それもそうじゃのう」

(これを手や口で……)

初春は内心焦りながら、男の太い槍をしごいていく。しかし、その動きはぎこちなかった。

「うーん……快樂とは程遠いんですがねえ」  
「う、うう……」  
「はあ……口は？」

溜息をつかれるが、初春はイチモツに顔を近づけた所で目を逸らしてしまう。  
鼻をつくのは男の肉の香りと、子日の愛液の香りの入り混じった淫靡な匂い。

催眠鎮守府 サンプル

「で、できぬ！このような破廉恥なこと、わらわには……！」  
「じゃあ、もういいですかね……続きがあるんで」

訓練士は子日の肩を掴むと、体を引き起こして抱き寄せる。  
そして初春に子日の体に向けて、肉棒を突っ込んで見せつけ始める。

「あっ、はっ、これ、すごいのお……！」

胸を揉まれながら嫌がる様子などさらさら見せず、どちらかと言えば快樂をよりむさぼらんと  
男の頭に腕を回し、自ら腰を振って求め始める子日。

それを見た初春は、自分の部屋を去る事しかできなかった。  
締めた戸の背後からは、廊下に響くほど大きな喘ぎ声が聞こえていた。



「秋雲よ」  
「なーに一、今修羅場中なんだけど……」  
「資料を貸してはくれぬか」

液晶タブレットと睨めっこしている艦娘、秋雲の部屋へと初春はやってきた。  
目的は、彼女の持つ”資料”を求めてである。

「無論、風紀がどうのと言うつもりもないしきちんと返す。というか、あの男がやって来てからは風紀も何もないからのう」  
「あー、訓練士さんねー。うん、いつもいい資料を提供して貰って……うん」

失言だったか、と口を抑える秋雲に対して初春は「よいよい」と返す。

「それらも含めて色々を見せて貰おうかと思うのじゃ」  
「なになに？そんなにあの人の下半身が気になる？」  
「そんな訳があるか！これは、あの男を追い出す為の……」  
「ふーん、まあいいや。秋雲の資料になってくれるなら、いくらでもどうぞー」  
「う、うむ……仕方ないのう」

そうして初春は、さまざまな本や映像を手に学習を始めた。  
その中に混じっている艦娘の写真や動画には最初こそ驚嘆したものの次第に目線を逸らす事なく視聴し始めるのだった。

「このように破廉恥な事を……」  
「あーそれね、先の方はもっとえぐいから」  
「何と！」